

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目： 若手研究（スタートアップ）
 研究期間： 2008 ～ 2009
 課題番号： 20820016
 研究課題名（和文）
 中世シリア社会の変容とザンギー朝の果たした役割：勢力均衡構図からシリア統一へ
 研究課題名（英文） The change of the Syrian society in middle ages and the role of Zangid dynasty: from the balance of power to the unification of Syria
 研究代表者
 中村 妙子 （ NAKAMURA TAEKO ）
 お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・研究員
 研究者番号： 60456275

研究成果の概要（和文）：セルジューク朝の宗主権下にあったザンギー朝が 12 世紀シリアの政治体制の変化に果たした役割の検証を、シリアの小都市に焦点をあわせ文献研究と現地調査により行なった。奇襲や包囲などの戦術が中心であった中世シリアに関して農業を含めた地勢学的検討は有効であった。シリアの小都市の利害とザンギーの政策が一致したことがザンギーのシリアでの領域獲得と所領経営を容易にしたこと、またジャジーラにおけるアルトゥク朝への重層的支配との相違などを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Focused on Syrian small cities, I performed documents study and a fieldwork to inspect the role that Zangid dynasty, which was under the suzerainty of Seljukid dynasty, had played in the change of the Syrian political system in the twelfth century. The examination of the geographical features was effective in the inspection of the Syrian society in middle ages whose tactics was a surprise attack or a siege. I clarified that the accordance of the interests of the Syrian small cities and Zangid's policy facilitated Zangid's acquisition of domains and its operation of lands in Syria. I also gave light on Zangid's multilayered rule over the Artuqid dynasty in Jazira, which differed from its rule over Syria.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	1,330,000	399,000	1,729,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総 計	2,530,000	759,000	3,289,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学 東洋史

キーワード：東洋史、イスラム、十字軍、シリア、ザンギー朝、ジハード、アレppo、セルジューク朝

1. 研究開始当初の背景

11 世紀から 12 世紀にかけて広く西アジアを支配したセルジューク朝の統治システムは、

ザンギー朝を経てアイユーブ朝・マムルーク朝まで継承されたというのが通説である。セルジューク朝の衰退期にあたる 11 世紀末か

らのシリアでは同朝の名目的な宗主権のもとに、ダマスクスやアレppoといった大都市や、それらの大都市に従属する中小の都市、あるいは、独立している小都市が、新たに参入した十字軍勢力も含めて互いに分立して抗争していた。ザンギー朝の創始者のイマード・アッディーン・ザンギー（以下ザンギーと略す）も、形式的にはアターベク（スルタンの息子の養育係）としてセルジューク朝の家臣の地位を守った。しかし十字軍侵攻初期の混乱期のシリアで、果たしてセルジューク朝の国家体制の継承が円滑に運んだであろうか。ザンギーがシリア支配の拠点としたのは、十字軍侵攻に伴う混乱によって、とくに疲弊の度を強めていた北シリアの中心地アレppoであったのである。ザンギー朝に関する個別研究は少なく、当該時期の十字軍史やシリア地方史、あるいはウラマー研究の中にそれぞれの視点からの研究が見られるのみである。

2. 研究の目的

研究代表者は、これまでに、12世紀前半において十字軍勢力とシリア諸都市との間で、戦闘と並行して行なわれていた各種協定や軍事同盟を検証することによって、シリアに生成した勢力均衡構図を明らかにし、その均衡を破ってシリア南部侵攻を行なったザンギーの軍事・外交戦略を分析してきた。これらの研究成果から、ザンギー朝によるセルジューク朝の国家体制の継承という通説に疑問を持ったのである。そこで12世紀のシリアの政治体制の変化にザンギーの果たした役割を、軍事外交面の検証に加えて、次項に示す考察を加えることで総合的に明らかにし、その上で広く中世シリア社会のあり方や、ザンギー朝からアイユーブ朝への移行システ

ムの検証をおこなうこととする。

3. 研究の方法

(1)第一段階として、ザンギーがシリアでの政権の拠点としたアレppoの在地市民層の独自の政治的行動や、十字軍勢力と独自の外交交渉を行なって独立を保っていたシリアの複数の小都市の動きに焦点をあわせる。ザンギーは、行政・軍事・財政各面とも、シリアとジャジーラ地方を切り離した統治を行っており、ジャジーラでの本拠地モースルの官職には、セルジューク朝体制内の人材を多用しているが、アレppoでは地元名家のウラマー層から登用しているのである。また、独立小都市は、勢力均衡構図の中では、その構成要素の一つとして大都市と同様に重要性をもつ。これら小都市をザンギーが飲み込むことが、ザンギーの政策にどのような意味をもたらしたかに注目する。これらは、いわば支配される側からの視点の検証である。

(2)この成果を踏まえて、第二段階では、シリア南下政策の中で、ザンギーがアレppoをはじめとする大小のシリアの地方都市にむけて行なった統治政策を所領経営という観点から再構築する。さらに、ジャジーラ地方に対する統治政策との比較検討を行ない、2つの地域にまたがるザンギー朝の統治体制のありかたを明らかにする。

(3)本研究の基本ツールは、一次史料と研究文献と現地調査である。校訂・出版されている史料のほかに、新たな史料・研究文献の発掘が望まれる。本研究の柱は、為政者の側からではなく、在地市民層や地方都市の側からの検証を目指すものであるからである。シリ

ア国立図書館に保管されているアラビア語写本は、マイクロフィルムの閲覧のみが許可されている。当該分野が十字軍時代に当たるため欧文の研究文献は多いが、研究の視点も多岐にわたるので、網羅的な素材の中から該当文献を絞り込む作業が必要となる。欧文の研究文献は各種検索システムでの検索が容易になったが、アラビア語の研究文献は現地での調査が重要となる。また、欧文の都市研究には、西欧の「都市の自治」の視点というバイアスがかかっているものがあるため、アラブの観点からの研究を検討する必要度が高い。現地調査は、地勢調査と地方史の発掘の二方面から行なう。本研究で検証するザンギーを初めとする各勢力の戦略について、文字史料の内容と実際の地形との照合により補完作業を行なう。調査対象の地域は、現在のシリア・アラブ共和国とトルコ共和国の二カ国である。

4. 研究成果

初年度は、国内外の書店経由で収集した史料・文献をもとに、既に収集済みの史料・文献も併せてシリアの小都市に焦点をあわせた分析を行ない、現地調査を行なう地域を選択した。12世紀初めのシリアでは、セルジューク朝の宗主権の弱体化にともない、北部のアレッポや南部のダマスクスといった大都市が周辺地域を併せて支配し、独立政権の様子を呈していた。シリアの小都市は、このような大都市に従属するものが多かったが、アラブ領主や、セルジューク朝の軍隊の主力であったトルコ人アミール（武将）が自立化した小都市の中に単独で十字軍勢力と外交交渉を行なうなど、セルジューク朝治下にあっても半独立国としての地位を保つものがあった。現地調査は、アラブの独立領主が支配していたシャイザルとカルアト・ジャウバルに

的を絞り、このほかに、アフアミヤ、マルカブ、カルアト・サラディン、ヒスン・アルアクラドなどムスリム勢力と十字軍勢力の争奪の対象となった拠点都市についても調査を行なうこととした。奇襲や包囲などの戦術が中心であった中世シリアに関して、農業を含めた地勢学的検討は有効であった。シャイザルは、西方にオロンテス川が流れる細長い切り立った崖上に城塞が立地し、前面（東方）に耕地が広がる。城塞は最大6層の構造で、備蓄量も相当のものと想定され、文献では12世紀前半にビザンツ帝国・十字軍の連合軍による24日間の包囲に持ちこたえたことが確認されている。現在、イタリアのベネツィア大学による発掘調査が進行中で、調査の完了と結果の公開が待たれる。カルアト・ジャウバル（ジャウバル城塞）は系統だった調査が行なわれないまま修復されているが、ユーフラテス川沿いの岩山を利用した城塞については、水運を管理していた近隣の同じウカイルー族の手になるバーリス城塞（調査後水没）の発掘資料を利用して、文献史料の読み込みが可能であろう。総合的に判断すると経済的な独立採算と自衛が可能で、地方拠点となりうる戦略的位置をしめるこれらの小都市をザンギーはシリア南進策の駒として用いたことが確認される。2年目（最終年度）は、この調査で入手した地方史の文献・地図等の分析をすすめた結果、研究の方向性をザンギーの戦略に絞り、現地調査の地域をシリア東部地域と現トルコ共和国東部のマールディン地域に拡大した。シリアではカルアト・ナジュム（ナジュム城塞）、マンビジュ、ブザーアなどの12世紀の通商路上の都市や、アザーズ、マアッラなどの農業地を検証した。マンビジュは平坦地で城塞は現存せず、東方からの防衛は勢力下に置いていたユーフラテス川左岸のカルアト・ナジュムが担

っていたと考えられる。またアザーズには小高い丘があったが住民に尋ねても来歴は不明で、マアッラは市街地化しており中世の様子は窺えないが、かつての穀物生産地である両地は、おおむね平坦で地形的には防衛は脆弱である。従って、その支配は近隣の防衛拠点と組み合わせる必要があり、十字軍の支配が継続した原因は防衛拠点の確保の問題と関連づけられる。一方、トルコ共和国では南東部のマールディンを中心に地勢調査を行なった。マールディンは、ザンギー朝がジャジーラ地方を支配するにあたって配下としたアルトゥク朝の中心地である。マールディンから南方に広がる耕地は、現在はシリア北東部と国境を隔てているが、歴史的には一体であった地域である。現在の国境は平坦な農地を貫いており、国境のトルコ側の人々は、アラブ人という意識でアラビア語を話している。城塞は現在も市の中心部にあり、岩山の独立峰の頂上付近に城塞跡（非公開）が残り、中腹部には階段状に住居が建てられ旧市街をなしている。四方に農地がひろがり勢力基盤の強さを想起させる。付近のインフラにはアルトゥク朝起源のものが多く見られ、シリア側の著者による文献史料の記述から読み取れる内容以上にアルトゥク朝の位置づけの比重は大きいと判断した。マールディンでは、トルコ国立アルトゥク大学を訪問し、2007年に同大学で行なわれたアルトゥク朝研究シンポジウムの報告書を入手した。また、非売の『アルトゥク史』の存在も確認した。本研究は、まとまった史料の少ない政権分立期の研究の弱点を、複数の政権の関係に焦点をあわせることで補っている。本研究では、ザンギーがシリアの勢力均衡構図を破壊していく過程で、シリアの小都市の側の利害とザンギーの政策が一致したことがザンギーのシリアでの領域獲得と所領経営を容易に

したこと、またジャジーラにおいては、アルトゥク朝の内部対立を利用することで重層的な支配を行ない、従ってシリアとジャジーラは同一王朝を形成したというよりはむしろ異なるシステムの上にザンギーが君臨していたことを明らかにした。しかし、ジャジーラにおけるアルトゥク朝の勢力基盤は強く、ザンギー朝宗主権下におけるアルトゥク朝の政権のあり方を再検証することが今後の課題である。その手がかりが本研究期間の最後にマールディンで入手できたことは成果であると同時に、この次なる課題にむけての取り組みの出発点であることを意味する。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 中村 妙子、初期十字軍時代におけるシリアの小都市—その外交交渉とシリアの勢力均衡構図—、お茶の水史学、査読有、52巻、2009、43-76

〔学会発表〕（計2件）

- ① 中村 妙子、初期十字軍時代におけるシリアの小都市、日本オリエント学会第50回大会、2008. 11. 2、筑波大学
- ② 中村 妙子、十字軍とシリア諸都市—その対立と共存、NIHUプログラム・イスラーム地域研究（人間文化研究機構）・公開シンポジウム「諸宗教からの平和的共存を問い直す」、2008. 7. 12、上智大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 妙子（NAKAMURA TAEKO）

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科

学研究科・研究員
研究者番号：60456275

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし